

---

# 喋喋喃喃

中村ミノ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

喋喋喃喃

### 【Nコード】

N4049BA

### 【作者名】

中村ミノ

### 【あらすじ】

美緒には少しだけ厄介な恋人がいる。

タイトル通り、二人の喋喋喃喃な雰囲気の話を目指したいなと思います。

基本的に一話完結です。

ネタが幾つかあるので連載の形を取っていますが、更新は亀以下の不定期になります。

二人は恋人？

——いい加減、眠いなあ。

美緒は欠伸をかみ殺して、耳に当てた携帯から聞こえてくる声にそんなことを思う。

薄情だと言われても、もう時間は夜中の一時だ。

話している本人は不規則極まりない仕事をしているからこんな時間でも元気だけれど、美緒はまだ大学生だ。

明日が休みじゃなかったら、いくら一ヶ月ぶりの電話だと言っても問答無用で切ってしまっているだろう。

丸一日の休みがもう二ヶ月も取れていないくらい忙しくて、デートどころか互いの顔を直接見ることすらままならない美緒の恋人は、そのくせメールが苦手で時間が取ればこうして電話を掛けてくる。それが分かっているからこうして一ヶ月ぶりの電話にだって、眠い目を擦りながら付き合っているのだ。

『ねえ、聞いている？美緒』

美緒の思考が軽くトリップしたのが分かったのか、向こうで不満そうな声が聞こえる。

少し低めの声は、仕事柄だろう聞き取りやすくハッキリ聞こえる癖に耳に心地よい。

——男前って言うのは声まで男前なのか。

そんな下らない事を考えてしまうほどに美緒は“落ちる”寸前だった。

『美緒？何か話して。さつきから僕ばかり話してるじゃないか』

「……もう眠いのよ。何時だと思ってるの？」

不満そうな電話の向こうの声に、尾と耳を下げた情けない犬の姿が思い浮かんで、美緒は答えながらクスリと笑う。

「寿宏さんさあ、もう三十一なんだから寝ないと明日ツライんじゃない？どうせ明日も仕事でしょ？」

『美緒、また俺のことおっさん扱いしてる』

「そりゃあ世間の同じ歳の男の人たちよりは寿宏さんは若く見えるけど、十分おっさんでしょう」

十九歳の、いや、出会った年齢で言うなら十七歳の女子高生に本気で迫ってきたロリコンだし、と心の中だけで付け加えておく。

そう、美緒が寿宏と出会ったのは二年前。

美緒が十七歳、彼が二十九歳の時。その年齢差十二。

確かに寿宏の見た目は若い。しかも、文句の付けようがなく格好良い。

男らしいと言うより端正と言った方が合う容貌は、けれどもも百九十センチの高身長とアーチエリーで鍛えたしつかりした体躯でなよなよした印象は欠片もなかった。

通り過ぎた人間の八割が振り返るのは、彼の職業のせいだけではないと美緒は確信している。

「冷たいよ、美緒お。久々に電話できたんだから、もっと優しい言

葉が聞きたいなあ。婚約者でしょ」

ほら、アイシテルとか、逢いたいとか言ってるらん？とぶつぶつ呟く言葉に、美緒は顔が見えていないのを良いことに盛大に顔を顰める。

「……寿宏さんのどこが『クールなS系男子』なの？」

美緒には大きな犬にしか見えない寿宏を、そう書き評していた雑誌を思い出して溜め息を吐き出した。

『あ、先週発売のnonnonnon見てくれたんだ？』

「たまたま本屋に行ったら平積みされていたから……」

嬉しそうに声を明るくした彼に、何となく気恥ずかしくてごにょごにょと言いつつ訳をしようとする。

「ーそう、美緒の恋人は日本中にファンを持つ、俳優の藤井寿宏なのだ。」

二年前、美緒の住んでいる町に映画のロケで滞在していた寿宏と偶然出会い、親しくなった事がきっかけだった。

日本中の誰もが知る良い男の寿宏と仲良くなれたことは単純に嬉しかった。

けれどそれが恋に繋がるかと言うと、美緒にとっては否だった。しかも、美緒はまだ未成年。

交際を受け入れたとしても、寿宏が淫行だと言われてしまう訳にはいかないからと取られた手段が【婚約】だった。

お付き合いを受け入れる事がイコールで婚約だなんて、十七歳の

高校生に領ける筈もなく首を横に振っていたのだが、それでも『美緒がいいんだ』と諦めなかった寿宏の頑張りで今の二人がある。

誰もが知る有名人との交際、しかも彼の周りには綺麗な女優やタレントが沢山いて、悩まない訳がない。

マスコミにバレれば平穏な生活すら奪われるだろうと分かっている、それでもなお、寿宏の手を取ることに領いたのはー。

『美緒、逢いたい。もう美緒が足りなくておかしくなりそう』

こうやって電話越しにでも分かるくらい、美緒だけを必要としてくれるのが分かるから。

『でも美緒、こんな風になかなか逢えない恋人なんてイヤだと思ったら、いつでも言っつて。いつも俺の都合で振り回してばかりで、美緒にとって俺と付き合う事なんてデメリットしかないのに、……ごめん』

そして、どうしようもなく寂しくせに、それを押し殺して泣きたいくらい美緒に優しいから。

「ばか、本当に良いの？別れても」

『……いやだ』

「だったら、そんな事言わないの。デメリットなんて、付き合つて決めた時にとくに覚悟出来てるって言うの！」

『美緒格好いいなあ。惚れ直しちゃうよ』

「当たり前でしょ、寿宏さんに負けなくらいイイ女になるんだから」

茶化しながらもどこか縋るような寿宏の思いが、掠れた声に現れてる気がして、胸の奥が痛くなる。

彼の口説き文句から逃げながら、彼の孤独に気が付いた時、癒してあげたいと思ってしまったのはきつと、既に捕らわれていたからだと今なら分かる。

『そんなに優しくされたら、もう離してあげられないよ?』

「望むところだわ。かかってきなさい」

わざと勝ち気に言い切ってやって、美緒はふとカレンダーに視線を送る。

出会って二年。付き合って一年。

生やさしい気持ちだけで付き合える相手じゃない。

ーだから、分かる。

彼がこんなに弱気な時は、酷く疲れている時や眠れない時。

「今度の週末、寿宏さんの部屋に行つてあげるから」

十二も年上の男相手に甘やかしてあげるのは未だに慣れないけれど、たまにはキーホルダーにぶら下がったままのマンションの合鍵を使ってみようと思う。

「少しくらい、逢えるでしょ?」

もしかしたら一時間足らずの逢瀬になるかも知れないけれど、二ヶ月も逢っていないのだから、それだけでも構わないと思う。

彼のために好物のホワイトシチューを作って置いてあげるだけでも、きつと喜んで貰えるだろう。

――何しろ私は彼の、婚約者なのだから。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4049ba/>

---

喋喋喃喃

2012年1月11日01時02分発行